# ひいおじいちゃんへの感謝

萩原小学校　五年　渡邊　壮吾

ぼくは毎日、コシヒカリという種類のお米を食べている。とてもおいしいお米で、ねばり気があってやさしい甘さがある。九十七才のひいおじいちゃんが作っている自まんのお米だ。「おいしいけれど、いつものお米とはちがう味だな。」四月の終わりごろ食べたお米は、おいしいけれど、いつもとちがうような気がした。お母さんに聞いてみると、

「よく分かったね。お米が足りなくて、初めてスーパーで買ってきてみたのよ。」

と、言っていた。ぼくは、お米の味のちがいにおどろいた。そして、ひいおじいちゃんが作る大好きなお米が、もう食べられなくなるのかと思うと、寂しく、不安な気持ちになった。確かに、ひいおじいちゃんのお米は、ぼくの家族以外にも、いとこやはとこの家族、もちろん、祖父母たちも食べている。三十人ぐらいの人が、毎日、楽しみに食べている。

ひいおじいちゃんはというと、お米よりもだいぶやわらかいものを食べていて、もう高れいだからお米はあまり食べないらしい。自分にお米を作ってくれるひいおじいちゃんは、とてもやさしいと思う。作ってもらえるお米は、今年が最後になるかもしれないとお母さんがさみしそうに言っていた。

大好きなお米を守るために、ぼくに何かできることはないのだろうか。

ぼくは、五年生になって、学校で田植えを体験した。田んぼに入ると、土がぬるぬるしていて、歩きづらく、足がとても重く感じた。初めての感覚に気持ち悪いとも思った。友達が、田んぼの土の中には、牛のふんが入っていることを教えてくれた。ぼくはさらに、気持ち悪くなった。田植えは楽しいとも思ったけれど、やっぱり大変だ。それに、お米はすぐにできるわけではない。天気を気にしたり虫がいないか確認したり、長い間、稲の成長を見守らなくてはならない。気の短いぼくに

は、待てる気がしないし、と中であきてしまいそうだ。

何かできることを考えていたのに、お米作りの大変さを痛感してしまった。ひいおじいちゃんは何年も、何十年も家族のためにお米作りをしていた。ねばり強くて、みんなにやさしい。ひいおじいちゃんは、まるでお米のようだ。お米にひいおじいちゃんの人柄が出ているからこそ出せるおいしさだと思う。九月には、学校で稲刈りの体験がある。稲刈りしても、すぐにお米を食べられないことに、おどろいたが、とても楽しみにしている。もし来年、またひいおじいちゃんがお米を作ってくれるなら、ぼくも田植えに参加して、みんなのためにお米を育てたい。稲刈りができるまで、お米の成長を見守って、今度は、ひいおじいちゃんにお米を食べてもらいたいと思っている。

「今までたくさん食べさせてくれてありがとう。」